

潮音寺だより

<ホームページ> <http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/>

第 242 号

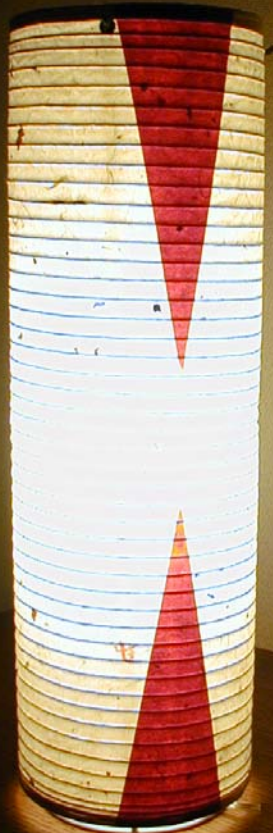
平成 15 年 12 月

電話 052-671-4831

ファックス 052-671-4856

E-Mail:choonji@aichi.email.ne.jp

〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬 1-10-11



乃^{ない}至^し十^{じゅう}念^{ねん}

【出典】『無量寿経』

弥陀^{だいた}に

わたしは
生かされている
護られている

ただ

そのことを
信ずるがよい

たとえ

十念でもよい

念仏で

生きる力が
湧いてくる

オリジナル行灯
施主：伏谷幸七

むかしの友

「親の因果が子に報い、生まれてきたのがこの子でござい……」と、へび女の絵が掲げられた見せ物小屋の入口の脇で、だみ声の男が呼び込みをしているような光景は、現在、見るようなことはありません。

仏教における因果心報という考え方が、ときに、例えば障害も持つ方の人権を侵害するといふことも、今日では、この因果に関することは、積極的に強調しなくなりました。といふより、説教の場でも、触れてはいけないことのようになっているのが現状であります。

しかし、目や耳を覆いたくなるような犯罪や事件が、近年頻発しており、前述のことは十分配慮した上で、仏教者は、因果心報の教え

を、避けて通るべきではないと思ふようになりました。

良心や道義心は、道理だけで身に付くものではありません。子どももの頃に繰り返し聞かされる、悪いことをすれば必ず報いがあるといふ教えは明快で、恐ろしい地獄図とともに、悪や不正や非道といったものに対する抑止力になり得ると思つのです。

そんな思いから、次のお話を聞いていただけますでしょうか。

………

むかし、金持ちの婦人が、二人の子どもを連れて街中を歩いていました。すると、素晴らしい豪華な品や、美しい品を並べて売っている商人がいきました。

婦人は、品物に見とれて、ゆっくり品定めをしようとして、上の子ども

に、家へ腰かけを取りに戻るよういつけました。商人は、婦人の顔をじっと見つめて、一ツと笑いました。婦人は、不快に思いました。子どもは、なかなか戻つてこなかったので、婦人は、戻つた子どもを打って叱りました。商人は、また笑いました。

もう一人の方の子どもは、小さな太鼓を打ちながら、踊り廻っていました。商人は、これを見て、また笑いました。

一方、父が病氣だといつて、その息子に、牛を殺して、すぐ脇の鬼神の像に供え祈っています。商人は、これを見てまた笑いました。

また、一人の若い母親が、子どもを抱いてそこを通り過ぎました。子どもがむずかり、母の頬を掻いて血を流しています。それを見て

商人は、また笑いました。

婦人は、商人にいいました。

「あなたは、先ほどからむやみにお笑いになるがどうしてですか。」

「むかし、あなたとは仲のよい友達でしたのに、お忘れですか。」

婦人は、変な男だと思つて、ますます不快に思い、キッと睨みました。商人はかまわずいいました。

「子どもを打つて笑つたのは、前世では、あの子どもはあなたの父上であつたゆえです。」

太鼓を打つていた子どもは、前世では牛で、主人であつた、あなたの子どものとして生まれたのです。その牛の皮で張つた太鼓を、自分の体とも知らずに打ち戯れているのを見て笑つたのです。

また、牛を殺して神に祭り、病気を癒そうとするのは、生かそうと

して殺しているのです。あの息子は、牛に生まれ変わる事になるでしょう。そして、何度も何度も殺された牛は、人間に生まれ変わるでしょう。可笑しいと思いませんか。だから、笑つたのです。

また、あの若い母親と子どもは、前世では、正妻と妾という関係であつたのです。命終つて、正妻の子どもとして生まれ、わがママをいったり、顔を傷つけたりして、恨みを晴らしているのです。母親は、それを愛しいと思つている。可笑しいじゃありませんか。

一世代だけでさきえさうですから、幾世代の間には、誠に笑つに堪えないことばかりです。仏の正しい教えを聞かないで、はかない現世の栄華にうつつをぬかしているからです。わたしはこれでお別れし

ます。他口必す、あなたの門前に伺います。さようなら。」

「こついに終わると、商人は忽然といなくなりました。その不思議さに、婦人は、ぼう然として家に帰りました。

それから幾日か過ぎた頃、婦人の家へ、友人と名乗る乞食が訪ねてきました。追い返そうにも容易に動かないので、しかたなく出て、「お前のよくな友達はいない。」と、荒々しいいきました。

乞食は、笑いながらいいました。「ちよつと妾を妾えただけです。ですから、世が変わつていたら知れるわけはありません。この命は一呼吸の間に過ぎません。永遠の道を忘れてはなりませんぞ。」
そついで残して去る男の後姿は、光り輝いていました。

因縁 いんえん

わたしたちが日常「因縁めいた話」とか「不思議な縁です」などと、なんとなく使っている言葉も、仏教の教えの中ではとても大切なものの一つです。「因」とは結果を生ずるものの直接的な原因で、「縁」は「因」を助けて結果を生ぜしめる間接的な原因、あるいは与えられた条件といった意味になります。

道端の一本の草花も、水や光や空気、それを守ってあげようとするいくつかの心がなければ生きながらえることができない。このよつな考え方を、一人ひとりの人間存在に於てはめてみますと、「わたくし」といつ人間は、両親の

住職通信

人目につかぬところ
人のいやがるところを
真っ先に取り組む事に
心の安らぎが得られる



結び付きという直接の原因によって、この世に一人の人間として生まれてきたわけですが、そのためには、それを可能とする無数の間接の原因があったことを忘れてはならないでしょう。

両親には、それぞれの両親があり、二〇代前にさかのばれば一〇〇万人を超えてしまいます。もしこれらの先祖の一組でもが、実際の組み合わせと違っていたら、いまの「わたくし」は存在しなかったかもしれません。しかし、この過去のことについては、わたくしにはどうすることもできず、与えられた条件としての縁に関するかぎり無力なのです。

しかし、与えられた条件の中で生まれてきたわたしたちが、この一生のなかで何を成し得るかは、強い意志を発揮することが必要になると思います。

また因縁という言葉は「因縁生起」「十二縁起」などの仏教の大切な考え方とつながっています。

ひろさちや 『仏教の百科』

雑記

▼感謝 その13

新築庫裏へのご寄付を、日比方夫様、高田正子様より頂戴いたしました。心より感謝申し上げます。



▼年の瀬

今年もいろいろありました。どうぞか、よいお年をお迎え下さい。

▼なんとまああんなに
なつて梅芙蓉 沐魚